

一枚のハガキ

「生きている限り」という言葉の後に、人はどのような言葉を紡ぐのでしょうか。99歳の映画監督、新藤兼人は「生き抜きたい」という言葉を続けます。

太平洋戦争下、招集されながらもクジで生き残ってしまった、その後ろめたさを感じながら生きてきた人の発する叫びです。

この99歳の新藤監督の、恐らくは最後となるかも知れない作品が、先頃公開された映画「一枚のハガキ」です。

「今日はお祭りですが、あなたがいらっしゃらないので、何の風情もありません。」これは、妻（森川友子）が招集された夫（森川定造）に宛てた葉書の文面です。夫への思いが切ない程に伝わってきます。この葉書を受け取った夫は、厳しい検閲の中返事を書くのを諦め、仲間の一人（松山啓太）に「もし生き残ることができたら妻から届いたこの葉書を妻に届けて欲しい。そして妻に確かに見たと伝えてくれ」と頼みます。

森川定造は、招集先から戦地に赴き戦死します。森川や松山と一緒に招集された兵士100人の内94人が戦死しますが、松山は残りの6名と一緒に生き残ってしまいます。

しかも、松山と森川の生死を分けたものは、上官のクジだったのです。自分でクジを引くことさえできずに、生死が振り分けられていく。これは、死んだ者にとっても生き残った者にとっても、戦争の不条理というには余りにも辛いものではなかったかと思えます。

松山が故郷に帰ると、妻が父と駆け落ちしていて、家には誰もいません。一人取り残された松山は、故郷を捨ててブラジルに移住することを決意します。そして、ブラジルに行く前に、仲間との約束を果たすため、葉書を届けるため友子に会いに行きます。

一方、森川友子は、夫定造はじめ家族を次々と失い、古い家屋に一人で厳し

い生活に耐えています。貧しい農家からも、容赦なく赤紙一枚で働き手を奪っていく。戦争の被害者は戦地で死んだ者だけではありません。友子もまた、戦争の明らかな被害者であり、こうした被害者の数は、測り知れません。

戦争によって何もかも失い、奪われた二人ですが、一枚の葉書に引き寄せられるようにして二人は出会い、最後は、二人で生きる道を選びます。二人は力を合わせて畑を開墾し麦を植え、明るい太陽の日差しの中、麦が豊かに稔るさまを映し出して映画は終わります。

映画のクライマックスで、二人がブラジル行きを決め、いよいよ出かける日の朝、囲炉裏で戦死した夫の骨の入っていない骨箱を焼くシーンがあります。友子は耐えきれず、半ば錯乱し、それがもとで、彼女が書いた葉書も家も全て焼け落ちてしまいます。

全てが焼け落ち、啓太は重い過去の頸木から解放されたのかも知れません。友子に対し、焼け跡を畑にして麦を植えようといえます。

二人が、戦争によって引き摺っているもの、背負わされているものを断ち切るためには、ブラジルに行くのではなく、汗と涙の染み込んでいるここで立ち上がるしかない、ということを経験はいいなかったのではないかと感じています。

そう思って見たラストシーンは、自然の中に人間が溶け込み、そこに新しい生命力が湧き上ってくるような感じがして、感動的でした。

(塾頭 吉田 洋一)